書評・Book Review

魚類学雑誌
50(1): 77–79

Fishes of Japan with Pictorial Keys to the Species, English edition.—T. Nakabo (ed.). 2002. Tokai University Press. Tokyo. lxi+1749 pp. ISBN4-486-01570-3. 36,000円（税別）.

本書は「日本産魚類検索　全種の同定　第二版」の内容に基づいているが，若干の改訂もなされている．著者構成は日本語版と異なっている．また，本書はオーストラリア博物館のJohn R. Paxtonが監修している．日本産魚類に関する英語の網羅的な出版物としては，日本産魚類大図鑑 (The Fishes of the Japanese Archipelago, 1984) 以来の快挙である．本書に収録された魚類は353科3863種であるが，この数字を見るといかに日本の魚類が多様性に富んでいるかがわかる．魚類研究者にとって魅力的なこの海域の魚類を知るために本書が大きな役割を果たすことは間違いないであろう．

内容的には日本語版の第2版と大きな違いはないが，特筆すべき相違はCharacteristics of the fish fauna of Japan and adjacent watersという章を設けたことである．この章で編者は日本周辺のアジアの魚類相について述べ，日本周辺の海産魚類の分布を特徴づける17の地域的区分を提唱している．また，日本の魚類の分布についても，従来「南日本」とか「中部日本」などと表現されていた表記を避け，本書では地域を厳密に定義している．地図を付したこの定義は分かりやすい．編者の提唱については，論議の余地はあるであろうが，曖昧さを排除したのは評価されてしかるべきであろう．厳密な定義なしには，建設的な論議は不可能である．

これだけ大きな本になると宿命的に誤植が生じる．表に示した問題点はその一部である．綴りの間違いや種小名の語尾の違いに関するものが多いが，シノニム関係が影響する場合もある．シノニム関係については研究者によって意見が分かれることが多い．しかし，表で問題にした例では，最近の文献に言及していないので，担当著者の見解が不明であるため，問題点として示した．

また，本書は日本の魚類をめぐる分類学的な問題点について日本語版と同様に，巻末のRemarks and Referencesで簡潔に紹介している．外国の研究者にとって極めて有用な情報が含まれている．歓迎されることは間違いないであろう．同時に，多くの未記載種や学名の定まっていない魚類が世界に紹介され，誰が研究中であるかも明示された．したがって外国の研究者は担当著者が速やかに研究結果を公表することを期待するであろう．この期待に応えることが本書の著者たちの今後の主要な課題となるであろう．

表1　学名についての問題

問題のある学名	適切な学名
Lycodes knipowitschi	*Lycodes mucosus*
Melanocetus johnsoni	*Melanocetus johnsonii*
Metavelifer mutiradiatu	*Metavelifer multiradiatus*
Muraena pardalis	*Enchelycore pardalis*
Muraenichthys aoki	*Scolecenchelys gymnotus*
Neobythites nigromaculatus	*Neobythites unimaculatus*
Neocentropogon aeglefinus	*Neocentropogon aeglefinis*
Oneirodes eschrichii	*Oneirodes eschrichtii*
Parabembras curta	*Parabembras curtus*
Paraplagusia blochi	*Paraplagusia blochii*
Phoxinus percnurus	*Phoxinus perenurus*
Polymixia sazanovi	*Polymixia sazonovi*
Praealticus tanegashimae	*Praealticus tanegasimae*
Priolepis nocturuna	*Priolepis nocturna*
Pyramodon lindus	*Pyramodon lindas*
Rhadoblennius ellipes	*Rhabdoblennius ellipes*
Talismania okinawaensis	*alismania okinawensis*
Thamnaconus tesselatus	*Thamnaconus tessellatus*
Thryssa hamiltoni	*Thryssa hamiltonii*
Triglops pingeli	*Triglops pingelii*
Scolopsis margalitifer	*Scolopsis margaritifer*
Sebastolobus alacamus	*Sebastolobus alascamus*
Simenchelys parasiticus	*Simenchelys parasitica*
Springeratus xanthosema	*Springeratus xanthosoma*
Squaliolus alii	*Squaliolus aliae*
Stichaeus nozawai	*Stichaeus nozawae*
Zoacres gilli	*Zoarces gillii*

（松浦啓一　Keiichi Matsuura：〒169–0073　東京都新宿区百人町3–23–1　国立科学博物館動物研究部　e-mail: matsuura@kahaku.go.jp）

トゲウオ，出会いのエソロジー　行動学から社会学へ．—森誠一．2002．地人書館，東京．214 pp．ISBN4-8052-0714-0．2,300円（税別）．

著者の森　誠一氏は自他ともに認めるトゲウオ研究の第一人者である．本著は，1997年に出版された「トゲウオのいる川—淡水の生態系を守る」（中公新書）に続く，森氏による2冊目のトゲウオ研究の普及書である．前著の出版以降，森氏は精力的に執筆活動を続け，「魚から見た水環境—復元生態学に向けて／河川編—」，「淡水生物の保全生態学—復元生態学に向けて—」（いずれも信山社サイテック），「環境保全学の理論と実践 I・II」（信山社出版）を監修あるいは編著している．その活動内容から，最近の森氏の関心はトゲウオ研究ではなく，保全生態学あるいは復元生態学に移行し，しかも水域生態系だけでなく，陸域をも含めた生態系全般の保全・復元の理論構築と普及にあると私は考えていた．その森氏が，なぜか前著から5年を経て本著を世に送り出した．この「なぜ」を知るために，本著を開いた．「なぜ」に森氏は答えてくれるだろうか？

本著は7章から成っている．順を追って見てみたい．

第1章は「“はりんこ”との出会い」である．ちなみに，“はり

んこ"とは西美濃地方におけるトゲウオ科の淡水魚に対する愛称であるという．この章では，森氏とはりんことの運命的な"出会い"が幼少の頃の思い出とともに語られている．また，学問的に早熟ともいえる森氏のトゲウオ学との"出会い"についても述べられている．さらに，はりんこが生息する湧水との"出会い"が，はりんこやトゲウオ学との出会いと同じくらいに熱く語られている．「湧き口で舞い上がる砂粒，底に沈む礫石に付着していく藻の成長，一方向にゆれ動く水草，一見無軌道に泳ぎ回る魚たちの群れ，ときどき池にポチャリと鋭く急降下するカワセミ」という湧水の原風景ともいうべき様子を描写し，そのような湧水との出会いを「この"出会い"は個人的なものではある，（中略）この湧水との"出会い"が，私という実体を通して問い直されることによって，今少し踏み込んだより普遍的なできごとになることを望むばかりである」として，森氏の研究活動や普及活動によって，湧水やはりんこの現状を明らかすることが氏の希望であるとしている．

第2章は「トゲウオ学の周辺」である．この章では，トゲウオ科魚類の分類や世界のトゲウオ学の歴史が論じられ，森氏と世界のトゲウオ学との接点についても述べられている．これらの記載は詳細かつ具体的であるため，これからトゲウオの生態研究に取り組む人にとって大いに役立つであろう．ただし，第1章において"はりんこ学入門"として，トゲウオ学の基礎が論じられており，第2章における記述と重複している感は否めないが，トゲウオとはどんな魚であるかを前もって読者に知ってもらうためには致し方ないであろう．

第3章は「ハリヨの世界から」である．この章では，現在わかっているハリヨの生態が詳しく論じられている．大卵少産か小卵多産かといった*r*-K戦略説や，地域個体群間の生態や形態の変異性についてである．森氏自身の具体的なデータに基づいて論じられているので，大変わかりやすい．ただし，*r*-K戦略説については，個体群間の変異性のあとに紹介したほうがよりわかりやすかったように思われる．

第4章は「"出会い"—雄と雌の関係」である．この章では，"愛のかたち"，"鱗がない半裸身"，"ナワバリ—愛ゆえに"，"結婚の条件—家づくり"，"厳しい夫婦関係"，"ハリヨ美人"，"横恋慕する雄たち"，"もてる雄ともてない雄"といった，ドラマのタイトルのような見出しで，ハリヨの産卵行動が描写されている．タイトルは少々陳腐であるが（失礼），海外の研究者をして「あなたの根気と体力に興味がある」と言わしめた，長時間・長期間にわたる水中観察によるものだけあって，その描写は目に見えるようでわかりやすい．

第5章は「エソロジーとの"出会い"」である．この章では，エソロジーの祖のひとりであるティンバーゲンによるイトヨの研究を紹介するとともに，エソロジーの歴史と現状が論じられている．また，「個体間で行動の相互作用によって形成される多様な社会関係や，社会構造の成立・維持・消失の過程を数量化し分析する分野としても展開できるはずである」というように，エソロジーの今後の研究の方向性に関する自身の考えを述べている．

第6章は「社会学との"出会い"」である．この章では「エソロジーを踏まえた個体から集団を把握しようとする視点こそが，昨今，ほとんど顧みられなくなった動物社会学という分野に一風を吹かせると，私は考えている」，あるいは「行動は個体間の相互作用を示す要素であると同時に，社会構造を枠組み化するための媒介でもある」として，エソロジーと社会学との融合が今後の課題であると述べている．おそらく森氏が現在考えている独自の学問体系を文章化したものと思われ，エソロジーと社会学の融合学問の発展を期待せずにはいられない．数編の映画を題材に，登場人物間の関係を生物の個体間関係にあてはめて社会構造を説明するという試みも大変興味深かった．ただし，この章は全般的に内容が少々難解なため，何回か読み返す必要があるかもしれない．

第7章は「自然の中の私，私の中の自然」である．この章では，森氏が調査中に出会った人々や自然とのエピソードが数編語られている．そして，「いろんなことをやってくれるハリヨのいろんな個体や，あるいはいろんな意見をもっている人々とのいろんな"出会い"を楽しんでいるのかもしれない」と自身の研究活動を述懐し，「人類がこれまで知り得なかった現象をかい間見る一人占めの恍惚感とその素晴らしさのためだ，と大げさに考えることにしている」と森氏の精力的な研究のエネルギーの源のひとつを明かしてくれている．

全体を通して，興味深く読むことができたのは，その硬軟織り交ぜた文体や論調によるところが大きいと思う．また，内容的にもこれからトゲウオ研究やエソロジーを志す人にとって大変有意義な著書であるといえよう．ひとつだけ難癖を付けるとすれば，本著のキーワードは"出会い"であろうから，すべての章のタイトルに"出会い"という言葉を入れて欲しかった．しかし，そうなっていないことが本著の価値を下げるものでないことは言うまでもない．

さて，私が最初に抱いた疑問，すなわちなぜ森氏が前著から5年を経て再び"トゲウオ本（こうした表現があるならば）"を著したかである．この点について，私は読み終えてこう考えた．おそらく森氏は，前著でもトゲウオ研究やエソロジーのおもしろさを読者に伝えたかったのであろう．しかし前著では，現場を見過ぎたゆえに，日本におけるトゲウオの危機的な生息状況を訴えることに主眼が移ってしまったのではなかろうか．前著が出版された1997年以前といえば，森氏は日本全国のトゲウオ生息地を飛び回りながら，時には行政当局と激しく闘っていた時期である（今でもそうであるが），当時はトゲウオや湧水地の保全についての関心が低く，そのため「これまで行政のスタンスの多くは，指定すること自体を目的とした傾向があった．それは保護の第一歩であり，手段の一つにすぎないはずである」というように，前著は腰の重い行政に対するもどかしさをぶつけるような内容になったものと思われる．その後の森氏や森氏の仲間たちの活動により，地域によっては保全策がとられるようになり，まだまだ保全が行き届かない生息地があるにしても，森氏としては今までの保全活動を一応総括することができたのではなかろうか（闘いはまだまだ続くであろうが）．そのため，前著でなおざりとなってしまったトゲウオ学やエソロジーの紹介と自身の今後の研究の方向性を改めて読者に伝える気になったのではなかろうか．これは森氏をそれほど詳しく知らない私の独りよがりの考えかもしれない．しかし，そのような観点でこの本を読むと，前著からのつながりが私には理解できる．

「私がけなげと思い入れしているこの小魚との"出会い"を通して，生き物たちの多様で予測困難な生活と行動と，それをエソロジカルな視点で見てみる面白さを感じとっていただければありがたい．また，まんざら捨てたものではない日本の自然の濃さの再認識と，残念ながら減少の一途をたどっている生息環境の現状を改めて知っていただければ幸いである」と森氏も言っているように，本書はトゲウオ学やエソロジー，トゲウオと湧

水地の保全について深く考えさせられる好著である．一度読まれることを改めてお薦めする．

（中村智幸　Tomoyuki Nakamura：〒386-0031 上田市小牧1088　中央水産研究所　e-mail: ntomo@fra.affrc.go.jp）

図書紹介・New Publications

魚類学雑誌
50(1): 79

□魚類学

新顔の魚．（復刻版）． 伊藤魚学研究振興財団が1970年から1995年に刊行した「新顔の魚」（阿部宗明著）が復刻されました．この復刻版は伊藤魚学研究振興財団が2003年3月31日に解散することになったため，最後の事業として刊行されました．原本はリーフレット（平均8頁）でほぼ1年に1回発行され，26年間に外国産を中心に約200種の食用魚を紹介しています．復刻版の入手方法は以下のとおりです．

購入申し込み先：（有）まんぼう社　〒262-0045 千葉市花見川区作新台6-15-12　電話：043-258-6420，ファクス：043-258-6422，e-mail: manbowsha@manbow-sha.co.jp　定価：4,800円（税別）

送料：2冊まで300円，3冊以上は出版社負担．

送金方法：郵便振替または銀行振込，現金書留にて送金して下さい．入金確認後に発送されます．

郵便振替口座　00130-2-415386　有限会社まんぼう社

銀行振込口座　みずほ銀行　八千代支店　普通　1419185　有限会社まんぼう社（代金の振込手数料は申込者負担）．

代金引換宅配便利用の場合：上記の定価，送料の他に代引手数料が加算されます．代引手数料は，2冊まで630円，5冊まで840円，6冊以上は出版社負担．

（松浦啓一　Keiichi Matsuura：〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1　国立科学博物館動物研究部　e-mail:matsuura@kahaku.go.jp）

□生態学

最新のサケ学． —帰山雅秀．2002，成山堂書店，東京．128 pp. ISBN 4-425-85101-3. 1,600円（税別）．本書はサケ学の入門書として，サケの魅力と重要性について紹介した，ベルソーブックスの11番目の著作である．サケの仲間の紹介から始まって，サケの生活史や母川回帰について解説し，資源変動のメカニズムや養殖や放流など水産上の諸問題まで，たいへんわかりやすく説明している．とくに第5章の「孵化場生まれと野生のサケ」は著者がもっとも力を入れて書いていると実感される章であり，今後の課題として(1) 自然河川の回復，(2) 目的に応じた地域集団の維持，(3) 回帰親魚の生物モニタリング，(4) 最適放流技術の確立の4点が解説されている．自然河川の生態系の保全なくして未来はないという著者の主張に全面的に賛同するとともに，河川の資源や生態系を上手に管理するためには今後どうすべきか考えさせられた．　（片野　修）

メダカとヨシ． —佐原雄二・細見正明．2003．岩波書店，東京．186 pp. ISBN 4-00-006730-3. 2,000円（税別）．岩波書店が刊行する現代日本生物誌の一冊であり，注目されている動物と植物1種ずつを解説し，最後にシリーズの編者と著者の討論があるという構成になっている．メダカについては，水田水路系で個体識別を施して，その行動や移動を追跡した研究が興味深く紹介されている．また，メダカの生息場所の特徴や外来種のカダヤシとの関係などもくわしく記述されている．ヨシについては，環境浄化や魚のすみ場所との関係がとくにおもしろかった．最後の討論を読むまで，メダカなら稲を取り上げた方がよいのではないかと思っていた．しかし，稲作がおこる前までは，メダカは湿地帯に広く分布し，ヨシ帯で生活していたという．なるほどと思った．　（片野　修）

鯰．—魚と文化の多様性—． —滋賀県琵琶湖博物館（編）．2003．サンライズ出版，彦根．214 pp. ISBN 4-88325-136-5. 1,200円（税別）．本書は，琵琶湖博物館が2001年に行った企画展「鯰—魚がむすぶ琵琶湖と田んぼ—」および関連したシンポジウムや講演・討論などをまとめたものである．分類，生態，民俗学，漁業から保全まで，異なる視点から鯰に焦点をあてた好著であり，随所に散りばめられた写真や図版も興味深い．一方で，著しい環境破壊が進められ，外来魚の巣窟になってしまった琵琶湖では，この20年，魚類群集の動態について過去の資料と比較検討するに足る知見すら得られなかった．鯰への関心に触発されて，琵琶湖やその周辺の魚類群集研究が活発となり，鯰を含めた在来魚の保全が進むことを強く希望する．　（片野　修）